

# 柞乃杜

秩父神社社報

柞乃杜(ははそのもり)

第 69 号

令和6年7月20日

(川 瀬 祭)



明治天皇御製

あらし吹く

世にも動くな

くごころ

いはほにねぞす

松のごとくに

# インバウンドの落とし穴

秩父神社 宮司 藪田建  
神道政治連盟埼玉県本部副部長

現在、毎日のようにニュースで取り上げられているインバウンドによる問題は世界各地で起こっている。  
特に観光立国である国々では様々な問題が浮上し、最近では地元市民からインバウンドによるオーバーツーリストに対する反対運動が起きているニュース映像を目にする。コロナ禍において低迷していた各方面の経済が、再び活発化した事は、実によいことではあるが、人の往来(特に観光面)が増加することで新たな問題が起こり、各地で摩擦が生じている。



我が郷秩父も例外ではない。都心からのアクセスが良く、山塊に抱かれ風光明媚で故郷の原風景に満たされ、伝統文化に彩られた祭禮は盛んに執り行われ、寺社仏閣参拝は勿論のこと、四季折々の食彩は豊かで、水(酒類)も人も良いならば人は来ない訳はない。実際、土日祝日は勿論のこと、平日でも交通機関は人の往来は多く、商店街や食事を提供する店舗などは長蛇の列ができ、秩父神社参道の番場通では歩行者天国なのかと見まがうほどの人波である。神社にも大勢の参拝者が訪れて境内をにぎわしている。遠近からの御神徳を求めての参拝や、見事な彩色を施された彫刻類を拝覧に来られる人々。境内の清浄な空気に触れて、身体と心を整えようと来社される氏子さんなど。お宮に仕える身である者からすれば、境内がこういった方々であふれるのは大変有り難いことであるけれど、泡沫の流行りで終わるような事にはならないで欲しいと思う。これは商売を含めこの地に根差し生活なさっている人々でも同じこと。経済が活性化し地元氏子が潤い豊かになることは、大変有り難いことだが、この地域の内在する容積を超えてしまえば、我が故郷はどうなるのか。実際京都などでは公共交通機関が大混雑し、地元住民らの通勤通学といった日常生活での移動が困難になっていく。人気のある店にはたくさん観光客があふれ、道路に集まることで交通渋滞や接触事故がおこり、景観保全地区では伝統的な風景や日本家屋などが注目されて、私有地への無断侵入や無断で写真撮影するなど、プライバシー侵害が報告されている。一方、インバウンドの波にのまれ、シャッター街が活性化するならばもしや、と思う場合もあるが、地域独自の商店などが無くなったり、少子高齢化によりやむを得ず土地を手放したり貸すことになった土地や店舗などを狙い、その土地に何の関係も協力もしないフランチャイズ(無論全てがそうではない)特に外資系が潜り込む事などは、愚の骨頂である。商店街の運営には多少の利益があるものの、地域の未来の為に何ものならないであろう。  
(次号へ続く)

## 解説 秩父神社(67)

杉山正司

### ◆ 続・秩父神社を巡る刀剣(一)

秩父神社ゆかりの刀剣について、当社社報「柞乃杜」で連載させていた。

令和五年に第六三号で紹介した秩父市指定文化財「脇差」(銘勝光・宗光)の研磨が完了し、さらに秩父神社を会場とした講座で、当社に關係する刀剣について話す機会があった。これらを通じて新たな知見が得られたので、拙い考察を紹介する。

#### 一 脇差の概要

まず、今回新たに研磨された脇差について、改めて見ていこう。

秩父市指定文化財 脇差 一口

長さ 五二・一センチメートル

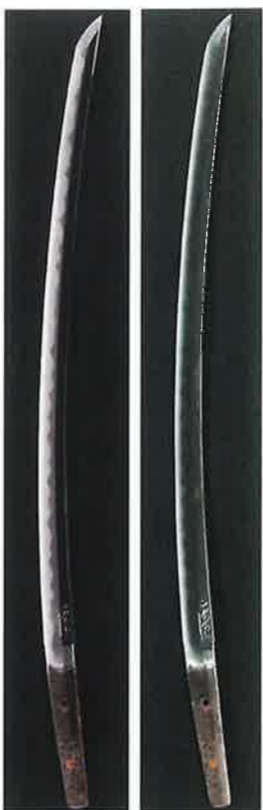
反り ハミリメートル

#### 〔折返銘〕

備前國住長船次郎左衛門尉

藤原勝光 同左京進宗光

形状は、鎗造、庵棟、板目肌つみ、帽子が乱れ込んで少し返る。刃文は、互の目に丁子交じり。



研磨前 研磨後

刀身表裏に「一髻文殊」と「愛染明王」の梵字を刻む。

#### 二 研磨前

次に研磨前の脇差の状況について、以下の所見があった。

〈表〉

- ・梵字下の鍔元に錆
- ・中央部付近に錆と傷
- ・切先に錆

〈裏〉

- ・梵字下の鍔元に錆
- ・梵字上の棟に錆
- ・中央部刃先に錆

・物打ちより切先にかけて錆以上の状態は、私が昭和六十二年に展覧会で拝借した際には、既に見られたものであった。錆は時間の経過とともに刀身内部に浸潤し、錆の一部分の研磨では済まなくなり、広く刀身に研磨を施すことになる。結果全身が痩せ細り姿



研磨前 研磨後

も変わってしまうことになる。借用当時も錆については懸念をしていたが、社報執筆にあたり改めて実見したところ大きな変化は見られなかったが、赤銅の鍔と白鞘の緩みなどがあり、藪田宮司(現・名誉宮司)も深く憂慮されて研磨を決断された。  
幸い埼玉県立歴史と民俗の博物館でお世話になっていた本阿弥雅



神前報告

#### 三 研磨後

令和五年一月二十六日、本阿弥雅夫先生の手により、当社神前に奉呈され、藪田宮司(現・名誉宮司)と権宮司(現・宮司)により奉告の儀が執り行われた。

刀身は、現代の名工の手により化粧研ぎが施され、刃文が華やかに浮き出した。さすが勝光・宗光という当時の名工の手による名刀としての輝きを取り戻したのである。まさに当時と現代の名工のわざの共演と言えよう。

また鍔も銀無垢一重鍔に、白鞘も新調し、新たな装いとなった。  
(元埼玉県立文書館館長)

# 神道と仏教 — その共存と複合の伝統 (後編)

名誉宮司 園田 稔

## 結び 超越への畏敬と自己相対化による寛容

伝統的な日本宗教は、このようにして自然と人事を問わず万事に人知を超えた見えない生命の霊的な働きを直感し、それをカミ(神霊)ともホトケ(仏性)ともして畏敬してきました。春の芽吹きにカミの宿りを感じ、山川草木の豊かな大自然のたたずまいに仏菩薩の世界やカミともホトケともする死者や先祖の霊が鎮まる他界を構想してきたのです。しかも日本宗教本来の生命観とは、人間を含む大自然の森羅万象の生命現象です。人間ばかりか動植物が生死をくりかえすなかで子孫に伝えられるものが生命であって、それをカミともホトケともする神秘的な靈性のはたらきとして畏敬するのが、そもそもの基本的生命観です。そこには、現に生きている人間だけが生存権を独占するような現代の世俗的生命観は見当らない。生者は死を免れないが、だからこそ個体の生死を超えて子孫に伝えられるのが他ならぬ生命です。そこに人知の及ばぬ生命の神秘を畏怖して、見えない靈のはたらきを感得する。神仏の観念は、この生命畏敬の宗教的表現にはかたまりません。

現代は、特に生命科学のめざましい発達によって、この地球全体がほぼ35億年の昔から壮大な生命連鎖の体系であることが明らかにされるに至りました。主に太陽エネルギーを吸収しながら地球上の大気と

海と大地とが微妙なバランスを保って、あらゆる生物が遺伝子を共有しながら生かされ生かされる生態系を成していることが明らかになったのです。この長い生態系の歴史のなかで、人類はわずか200万年の生存にすぎないこともわかってきました。ところが、壮大な生態系の小さな仲間ではない人類が、この近々100年のあいだに地球資源を私物化して乱用し、ついには地球全体の生態系を破壊する深刻な環境問題を引き起こしてしまいました。そこでは、国際的な環境保全の対策が各方面で始まってはいますが、それを徹底して進めるためにも現代を支配する物質至上主義の文明を軌道修正して、ぜひとも生命尊重の文明を実現する必要があります。地上の全生命の繁栄と共生こそが、その一員の人類の生存をも可能にする。その意味からも、小さな春の若芽も見過ごさぬような生命あるものへの畏怖とその靈性への畏敬をめざして、諸宗教が相互理解と相互協力することが喫緊の課題でありましよう。

終わりに、とりわけ宗教と寛容の問題につき、一言して結びとおきます。

一般に宗教とは、人間が生死の自覚を契機にして必然的に営む超越への志向とかかわりとが造り出す文化ですが、その造形は背景となる文化と歴史の違いによってさまざまに多様です。しかも、神とか仏という神秘的な超越の存在に、何らかの象徴を通してコミットする現実の体系が宗教です。つまり本来は、超越するものを志向する宗教自体は超越する存在ではないのです。ところが、

とかく現実の宗教が志向する超越者を絶対視するあまりに、宗教そのものすら認めぬ非寛容に陥るのではないのでしょうか。本来であれば、たとえ個別の様式



当社に伝わる「妙見星神図」

のを自己絶対視する傾向があるのです。たとえば、禅仏教の至言に「指月の月」という言葉があります。夜空に輝く月を指さして「あれが月だ」と表現しても、指さす月は手の届かぬ本物の月ではありえない。ところが指さす月をとかく本物の月と混同するように、超越者を志向する宗教があったかも超越存在そのものであるように振る舞うことで、宗教そのものが自己絶対化する危険は自戒しなければなりません。熱心な信仰を鼓吹する教団や宗派が、信奉する神や真理の超越性を強調するあまりに、現実の教団や宗派そのものを超越存在と同一視して自己絶対化してしまうと、とかく他の宗教宗派の存在

こそ違え互いに超越への畏敬による謙虚な自戒を共にする宗教同士であつてみれば、互いに絶えず超越者に照らして自己絶対化を戒め、共に相対存在を自覚するからこそ諸宗教が互いの道を認め合うことが寛容の原点ではあるまいか。われわれ人間は、地上の全生物と等しく生命存在です。だが、その生命連鎖の神秘に目覚め、そこに自己超越の尊い靈性を見出したのも他ならぬ人間です。人間として生命の尊厳を保つためにも、全生命に連なる靈性への畏敬を共にすべきでありましよう。

### 【表紙歌解説】

明治天皇御製

あらし吹く 世にも動くな 人ごころ  
いはほにねぞす 松のいこゝに

### 口語訳

どのように風の吹き荒れる世の中の変動に直面しても、人は心を動揺させることがあつてはならない。たとえば巖の上に根をはっている松のように、不動の心でいたいものだ。(明治42年)

### 出典

『新版 明治の聖代』 発行日 平成二十四年七月三十日  
(編者・発行者 明治神宮 製作者 錦正社) 304頁

### 【表紙絵解説】

この度の表紙絵画は、秩父市内にお住いの野口萌衣さんが第十五回「郷土を描く児童生徒美術展」において、埼玉県知事賞を受賞した秩父第一中学校二年生時の作品を掲載させて頂きました。作成にあたり、何度も神社に足を運ばれ自身の思い描くものを追求されたとのことで、夏特有の空気感、質感を色濃く感じさせる作品に仕上がっています。

ご本人によると「令和二年時はコロナ禍のまっただ中で、マスクをしている神社の狛犬を見つけ、今の状況にふさわしいと思ひ描きました。強い日差しに照らされた夏の爽やかさを表現することに努めました。早くコロナが収まり、狛犬も人々もマスクをしなくて済むようになって欲しいと思ひ描きました。」と述べられました。今後益々のご活躍を期待しております。



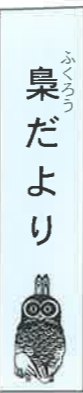
また、神宮宮掌の方より、神宮の創始と神宮大麻についてご講義頂きました。神宮の由緒や祭祀、大麻頒布の歴史や意義など、神宮に奉職されている方から直接お話を伺うことが出来ました。研修の最後に

◆ 巫女神宮研修会を終えて

本年の五月二十八・二十九日に行われ、神道青年全国協議会様主催の「巫女のための神宮研修会」に同僚の笠原巫女と二人で参加させて頂きました。

内宮正宮や外宮御垣内参拝、御神楽奉納の拝見など貴重な体験もさせて頂きました。

また、神宮宮掌の方より、神宮の創始と神宮大麻についてご講義頂きました。神宮の由緒や祭祀、大麻頒布の歴史や意義など、神宮に奉職されている方から直接お話を伺うことが出来ました。研修の最後に



梟だより

◆ 奉賛者御芳名簿(13)

令和五年十二月〜令和六年六月迄  
神社扱い  
十万円 市川 昇

◆ 鎮座二〇〇年奉祝事業

秩父神社の御神苑である「柞乃杜」の奥深く、御本殿より東北の方角にあって、湧水の際にも決して枯れたことのない「乾の井戸」は、今日でも清らかな湧水を滾々と湛え、境内を流れる小川の水源としても利用されています。

◆ 秩父神社「妙見神水」について

今回の研修での経験を活かし、習得した神宮についての正しい知識をもって神宮大麻頒布増体や家庭祭祀信仰の発展に貢献できるように務めて参りたいと思います。



は、別の神社の巫女さんと神宮について伝えていくためにするべき事を話し合う時間もあり、とても有意義な二日間となりました。

◆ 訃報  
氏子青年会第六代会長 正田裕幸様に於かれましては、病氣療養中のところ、令和六年二月二十三日ご逝去されました。(享年六十六歳) 会長在任中には、創立十五周年事業を盛大に挙行する等、ご活躍を頂きました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。



【御初穂料 五百円】

この度、この御神水を当社ご参拝の皆様には特別にお頒ちすることと致しました。大神様のご神徳を深くお身体に取り込まれ、日々健やかに過ごして心よりお祈り申し上げます。

をを通して良好で柔らかな水質(軟水)を保ち、なめらかで大変美味しく、地域の生活や様々な造りにも利用されているほか、平成二十年に環境省が選定した「平成の名水百選」にも選ばれています。ユネスコの世界無形文化遺産にも登録される「秩父夜祭」は、この武甲山の蛇窪に棲むという龍神様が、春の御田植祭に豊穰の水として流れ下り、生命を結び山に帰るといふ神事として語り、秩父の山川風土の恵みの中に高遠なる神仏のご守護を願ったものなのです。

◆ 秩父神社妙見講

- 自 令和 六年 二月 至 令和 六年 七月
- 四月 六日 宮側講
- 四月十五日 皆野妙見講
- 五月 四日 原谷講
- 五月十五日 近戸講
- 五月二十六日 中宮地講
- 六月二日 熊木講
- 六月十五日 日野田妙見講
- 六月十五日 本町講
- 六月十六日 下宮地講
- 六月十六日 別所講
- 六月十六日 根岸普一講元外六十二名
- 六月十六日 井上哲雄講元外六十六名
- 六月二十三日 下郷講
- 江原謙一講元外二百九十一名

◆ 柞乃杜神前結婚式報告

北葛飾郡杉戸町 高橋 陽・洋希様  
大里郡寄居町 宮前和行・麻莉様  
秩父市上影森 久米悠平・茉莉様  
秩父市上宮地町 浅香秀宗・美津紀様  
大里郡寄居町 島野直人・早織様  
未永く幸せな家庭をお築き下さいますようお願い致します。

◆ 浅賀克彦大総代ご逝去



去る三月九日享年七十九歳をもって浅賀克彦大総代がご逝去されました。浅賀様は、昭和十九年十月二十八日、秩父市中町の浅賀家に生を受けられ、学業に秀でて、埼玉県立浦和高等学校、更には青山学院大学へと進み、日本リीडースダイジェストに生業を得られて後、昭和五十二年より、家業である坂上建材の仕事にお就きになられました。先代の浅賀政治様とお力を合わせて浅賀家の基を築かれますと共に、秩父地域の発展にも一方ならぬご尽力を賜りました。

平成六年には、まだ発足間もない秩父神社氏子青年会の第二代会長にご就任され、その人望篤いお人柄は皆に慕われるところとなりました。その後も秩父ロータリークラブ会長や秩父市中町会会長、また中町屋台保存会会長などの要職を歴任され、平成十六年から先代に続き当社大総代にご就任になられ、神社の発展のため常に日向にご尽力を頂きました。

茲に謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



就任挨拶  
氏子青年会会長 関根 大介  
令和六年度総会におきまして、第十五代会長に就任いたしました。中町の関根大介です。

この氏子青年会に関わるにあたり、不易流行の理念を持ち、会員の皆様と一致団結し、祭事・神事の助勤をはじめとする数々の事業に取り組み、安心安全なこの秩父地域の活性化につながる試みができますよう、努めて参る所存でございます。



退任挨拶  
氏子青年会前会長 中村 文治  
令和六年度総会におきまして、会長職を退任することとなりました。宮司様をはじめ神社職員、会員の皆様にはご指導いただきました深く感謝し謹んで御礼申し上げます。

在任中には、氏子青年会関東連絡協議会「埼玉大会」開催協力や全国氏子青年協議会第六十一回大会への参加期間祭事への参列等、充実した二年間でした。結びに、関根新会長のもと、これからも人と人とのつながりを大切に、氏子青年会が更なる発展が出来ますこと、秩父神社様の益々の隆昌をご祈念申し上げます。退任の挨拶とさせていただきます。

◆ 氏子青年会役員名簿

名誉会長	蘭田 稔(名誉)
顧問	蘭田 建(宮司)
相談役	丸岡 清一郎(東)
	原嶋 清(上)
	山本 修(上宮)
	吉田 恵(中)
	井深 昭(本)
	大島 隆(本)
	大澤 孝(本)
	新井 豪(中)
	栗原 龍馬(上)
	塚越 亮一(本)
賛助会会長	中村 文治(東)
直前会長	中村 文治(東)
副会長	関根 大介(中)
	黒澤 守(本)
	町田 博(本)
	高野 洋(上)
	中野 洋(上)
	高野 洋(上)
	市川 幸司(中)
	魚津 拓斗(上)
	赤坂 元規(本)
	阿佐美 昌士(本)
	池田 直哉(道)
	能見 史高(本)
	峰岸 亮(上)
	他 九名
総務部長	柏葉 靖夫(金)
副総務部長	他 六名
幹事	伏見 博樹(権)
	宮田 和裕(権)
	長谷川 武史(宮)
	今井 修(中)
	守屋 太一(上)
	七十六名

### ◆ 秩父神社と本殿遷座祭

権瀬宜 淺見知史

本年令和六年において、御鎮座二千百年奉祝事業の一つである社殿修理事業が完了し、足掛け十年に及ぶ事業が終了となる。

当社は延喜式内社として永い歴史を有し、近代社格制度に於いては、國幣小社として秩父地方の総社と位置付けられてきた。その事により式年大祭では皇室より臨時のご幣帛の下賜があり、記憶に新しいところだと平成二十六年二一〇〇年式年大祭において臨時のご幣帛を賜った。今回のご本殿修理事業における臨時のご幣帛下賜はもとより、令和七年に当地で行われる全国植樹祭で天皇皇后両陛下をお迎え



昭和45年 本殿遷座祭①



昭和45年 本殿遷座祭②

えする氏子の皆様にも、皇室との関りを振り返る良い機会ではなからうかと考える。

そもそも遷座祭とは、神儀を本殿より仮殿もしくは権殿へ、また仮殿もしくは権殿より本殿へ遷し奉る厳儀で、前者を仮殿遷座祭、後者を本殿遷座祭といふ。遷座祭には社殿の改造、または修造等に当たつて臨時に行われるものと、六年、十二年、二十年、三十年、四十年、五十年、六十年等の周期を以て行われるものとがある。定期的のものは式年遷座祭と称する。

遷座祭とは、時を定めて社殿を新たにし、一段と神威の輝きを押し奉らんとするもので、神儀の動座を主眼とするため、古来何れの神社にあつて

も最も重要な祭儀とされてきた。

昭和四十一年九月二十五日、台風二十六号が猛威を振るい、ご社殿は倒木により半壊となり、境内にも甚大な被害を被つた。再建にあたり神儀は仮殿に遷され、旧社殿から後方へ約一〇メートル移動した所に、可能な限り旧材を用い、彩色も復元されたご社殿を荒木社寺設計 坂本才一郎氏設計・施工により昭和四十五年十月二十五日竣工。皇室からの臨時ご幣帛を賜り、当時の蘭田武男宮司を始め職員・秩父郡内の神職、奉賛会長以下大総代・地区総代の奉仕により本殿遷座祭が斎行されたのである。

鎌倉幕府の武家法『御成敗式目』に「神は人の敬に依りて威を増し、人は神の徳に依りて運を添ふ」とあるように、神祇祭祀は日本民族固有の信仰として三千年の歴史を有するが、古くから神社は氏人により、降つては氏子によつて社会生活の中心として奉斎され、氏人は氏の繁栄を、村人は村落の守護、とくにその



昭和45年 本殿遷座祭③

年の豊作を祈願し、感謝を捧げてきた。しかし祈願の趣旨は常に社会的なもの、公共的なものであり、報斎の形態も、「祭」を見てわかるように、集団として行われてきたのである。その最たる例がこの本殿遷座祭ではなからうか。今回の遷座祭に関わつた全ての人が当社を次世代へと繋げていくと願うばかりである。

### 編集後記

■今年もまた猛暑の夏を迎えて、ここに社報第六十九号をお届け致します。記録的な円安の中、訪日観光客がオーバーツーリズムの様をなし、その姿は当地においても散見されます。それは伝統文化と自然環境が魅力的と評価されていることでしょう。面目一新したご社殿も多くの皆様方の御浄財で完成致しました。改めて感謝申し上げます。

※ 本報の用紙は再生マツト紙を使用しています。

令和六年(二〇二四)七月二〇日  
編集 秩父神社社務所  
発行 秩父神社社務所  
〒368-0004 埼玉県秩父市番場町一―三  
TEL (〇四九四) 二二―〇二六二  
FAX (〇四九四) 二四―五五九六  
印刷所 有限会社 坂文社印刷所  
〒368-0004 秩父市東町二七―八